

内容紹介

福島にはいまでも空間線量の高い場所がある。子どもたちの体内に蓄積した放射性物質を、県外の受け入れ先で楽しく過ごさせることで排出させるという「保養」に取り組むNPO職員。京都に避難した妻子と暮らしたいが、国が予算を聞き入れ、海外まで深い絆が広がった仕事を放り出すわけにはいかないと思う。沖縄の宮古島に避難した看護師、会社を辞めて南相馬にUターンした青年、先祖代々の土地が中間貯蔵施設の予定地と知った大熊町の自営業者の人生も一変した。4年目の夏、過酷な原発事故を問い直す。

初出

朝日新聞 二〇一四年七月四日～七月二十七日

第1章	「夜行」で妻子の元へ
第2章	早く成長しないで
第3章	新幹線見送り泣いた
第4章	子ども「保養」で守る
第5章	訴え届き国から予算
第6章	「ここで移動教室を」
第7章	フランスへ声届けに
第8章	「でも、やんなきゃ」
第9章	沖縄、いいんじゃない？
第10章	ほっとできる新天地
第11章	コンパス使い島歩き
第12章	虹のような懸け橋に
第13章	心を縛る避難の記憶
第14章	「本当に戻れるのか」
第15章	戻らないと後悔する
第16章	学び、遊んだ男子会
第17章	「別居婚」のジレンマ
第18章	妻子と土のある生活
第19章	帰還困難でも自宅へ
第20章	「貯蔵予定地」に落胆
第21章	除染しても仕方ない
第22章	支え合わないとね
第23章	方向転換し新天地へ

第1章 「夜行」で妻子の元へ

福島県の郡山駅前から、京都市への夜行バスが出ている。

夜10時5分に発車し、磐越道を新潟に向かう。北陸道に入り、日本海沿いに富山・福井を通して琵琶湖をかすめ、翌朝の8時10分に京都駅前に着く。10時間超という長旅だ。

福島市に住むNPO職員、吉野裕之（よしのひろゆき）（48）は、もう20回以上もこのバスに乗っている。京都に避難している妻子に会うためだ。

バスは40人乗りで満席のときもある。発車して20分もすると、オレンジ色の車内灯だけを残して明かりが消える。タイヤの走行音だけが車内に響く。

バスは2時間半おきにサービスエリアで休憩をとる。吉野はそのたびに外へ出て深呼吸し、星空を眺める。何度乗っても慣れない。眠れない。

原発事故後の2011年7月、妻のマヤ（48）と、4歳になったばかりの長女の楓（かえで）（6）が京都市山科区の市営住宅に自主避難した。

吉野が京都に着いた14年6月15日は、この春1年生になった楓が通う小学校の授業参観日だった。マヤと一緒に道徳、国語、算数の授業を見た。

国語の時間。先生が鳥のくちばしの絵を見せて「これは何のくちばしでしょうか」と質問する。楓が手をあげた。「オウムだと思います」

正解。しっかりした口調だった。

福島の自宅は避難指示区域ではないが、幼い一人娘への影響が気になって避難させた。離れて住めば、なおさら楓に会いたい。学校の行事にもできるだけ参加したいと思う。

それで選んだのが夜行バスだ。運賃は片道6千円ちょっと。東京乗り換えの新幹線の3分の1で済む。

自主避難の3年間で一番驚いたのは、楓がトイレを全部一人で済ませられるようになっていたことだ。

だが、妻のマヤはいう。雲梯（うんてい）で端まで行けるようになったとか、三つ編みを覚えて編んでくれたとか。

「彼には、その一つひとつに気づく機会がないんです」

帰りのバスは京都駅発が夜9時15分。席は前から2列目だ。吉野はカーテンを少し開けて外に目をやる。もう一度、そしてまた一度。バスが高速に上がる直前、左手に妻子が暮らす市営住宅の明かりが見えた。

翌朝6時50分に郡山駅東口に到着。7時35分発のJRに乗って福島市へ向かう。福島駅に着くと仕事が残っている。

第2章 早く成長しないで

一人娘の楓（6）の授業参観に出るため、2014年6月15日に福島から夜行バスで避難先の京都を訪れた吉野裕之（48）。翌日、妻マヤ（48）、楓の3人で琵琶湖へ遊びに行った。

水はまだ冷たい。でも、水着姿になった楓はどんどん深いところへ入っていく。水が胸の下まで来ると、浮輪に乗ってはしゃいだ。

吉野は、震災前年の10年夏に南相馬市の海辺へ遊びに行ったことを思い出した。楓は3歳。波を怖がって泣き、とうとう海に入らなかった。

その海水浴場は、震災の津波で壊れてしまった。

琵琶湖から電車で避難先の市営住宅へ帰る。団地のそばの公園で楓が雲梯（うんてい）に駆け寄り、「端から端まで何秒か測って」と飛びついた。

ゴールデンウィークのときは、ぶら下がるのが精いっぱいだったのに体を振りながら進んでいく。「いち、にい……」と吉野が数える。9・5秒で到着。楓は誇らしそうな顔で、手のひらのまめを見せた。

部屋に戻ると夕飯までの間、トランプで遊んだり、楓が夢中になっている相撲の雑誌を見たり。

鶴竜力三郎（かくりゅうりきさぶろう）はモンゴル・スフバートル。大砂嵐金太郎（おおすなあらしきんたろう）はエジプト・ダカハリヤ……。名前から出身地まで覚えている。応援しているのは勢翔太（いきおしょうた）。「かっこいいから」だ。

6畳の和室に座卓を出して夕食。カレーと、もやしのサラダ、カボチャの煮物、カブのスープ……。

一家3人がそろると、小さな座卓は皿でいっぱいだ。楓は「おながすいた」と、吉野の皿のカボチャもあつという間に食べてしまった。吉野は「よく遊ぶもんね」とほほ笑みながら楓が食べる様子を眺めた。

台所の柱には、鉛筆で薄く線が引いてある。楓の身長記録だ。

最初の線は、11年7月に4歳で越してきたころに引いた。最近の14年5月28日の線まで18・5センチ。この3年で頭ひとつ伸びた。

いま身長123センチ。1年生なのに3年生に間違われることもある。背丈のせいだけでなく、避難生活で我慢を覚えて大人っぽくなっているからじゃないか。吉野はそう思う。

一緒にお風呂に入ると別れの時間が近づく。福島行きの夜行バスに乗るため、夜8時に部屋を出る。

楓は寂しいと泣いたことはない。ただ、「おんぶして」と背中に乗り、なかなか下りようとしない。

父さんが知らないうちに、あんまり早く大きくならないで——。吉野は切なく願う。

第3章 新幹線見送り泣いた

福島市に住むNPO職員、吉野裕之（48）が妻子を避難させる決心をしたのは、2011年3月15日だった。3日前の12日から、福島第一原発では次々に爆発が起きていた。

「放射性物質が、さらに飛散するかもしれないと思いました」

とりえず妻マヤ（48）と3歳だった娘の楓（6）を、東京のマヤの実家へ避難させることにした。

3月15日、東京―那須塩原（栃木）間で東北新幹線が運転を再開した。しかし、那須塩原までの100キロを走るガソリンがなかった。

20日、吉野の姉が、ガソリンスタンドを回って満タンにした軽自動車を貸してくれた。福島市を午後3時に出て国道4号を南下する。那須塩原駅に着いたのは6時ごろだった。

新幹線は避難者でごった返しているだろうと予想し、車の中で一晩過ごすことも覚悟して寝袋を積んでいった。だが、新幹線は1両に数人しか乗っていない。「避難の動きに後れをとったのか」と焦った。しかし、どうやらそうでもない。もっとみんな避難しなくていいのか、と思った。

発車前の新幹線の中で家族そろって写真を撮った。

「もう会えないかもしれない」

妻子を乗せて遠ざかる新幹線に向けて、シャッターを10回切った。

帰りの車の中で吉野は泣いた。

4月上旬、チェルノブイリ原発事故の被災者を支援する医師と福島で会う機会があった。吉野は「家族を避難させたんですけどいつごろ戻せますか」と尋ねた。医師はいった。

「今、福島市で毎時1マイクロシーベルト超の場所が至るところにあります。事故から20年以上たったベラルーシでは、このレベルの線量の土地に人はまだ暮らせていません」

福島にすぐには戻れないという意味だと受け止めた。妻子の移住先を本気で探し始めたのはそれからだ。

被災者の受け入れに前向きな長野県松本市役所に電話した。「100人待ち」といわれた。

翌日、福島県を支援する京都府庁に電話した。応対は親切だった。

「受け入れの部屋はあります。でも、市営住宅の方がきれいで空きもある。聞いてみたらどうですか」

数日後、府の支援バスで京都へ下見に行った。夜9時着なのに、府の担当者が待っていていた。

「今日の宿泊は府で用意します。しばらく滞在されるなら、被災者を支援するホテルがあります」

京都に移ることを即決した。

第4章 子ども「保養」で守る

2011年7月に妻子を京都に避難させながら、吉野裕之（48）が福島市に残ったのは、「保養」の取り組みがあったからだ。

「保養」というのは、福島の子どもたちを遠い場所にしばらく滞在させ、体内に蓄積した放射性物質を排出させようというものだ。

震災前、吉野は福島のイベント企画会社で働いていた。社員7人の小さな会社。だが震災と原発事故で仕事が激減した。

11年5月1日、子どもたちを被曝（ひばく）から守る活動をする民間組織が福島市で設立された。吉野は15年ほど前から環境保護と子どもの権利を守る市民運動にかかわっており、そのつながりで世話人の一人になった。

6月に会社を辞める。8月、福島の避難所支援をしていたNPO「シャローム」の職員に採用された。そこで保養プログラムを担当することになる。

近隣県や関西のほか北海道や沖縄など、子どもたちを受け入れようという組織の申し出を、福島の人たちにつなげるのが主な仕事だ。

前職を生かしてプログラムを企画し、一緒に実施してくれる人たちを探す。協力を広げるために福島の様子を講演しに出かけたりもする。

放射性物質が代謝で体の外に出て半分に減るのには、9歳くらいの子どもで40日間ほどかかるとされている。それだけの日数をかけて線量の低い土地で過ごすのが理想的だ。

だが実際の保養は、短いものと土日だけとか、長くても夏休みなどの1週間や10日間程度とか。こんな短い期間で保養とっていいのか。思い悩むこともあった。

だが、外遊びに神経を使わなければならない福島にくらべ、保養先では思う存分に外で遊べる。

初めて乳幼児や小学生ら30人ほどを札幌の保養先に送っていったとき、思う存分遊んで元気を取り戻した子どもたちに、迷いは消えた。

線量がたまってからでは遅い。少しでもたまらないように、子どもたちを連れて出かけるんだ――。

14年夏までに、吉野が保養に連れて行ったのは600人に上る。

活動がなかなかうまくいかず、もう自分も引越そうかと弱気になったこともある。それでも福島にとどまっているのは、娘を避難させることができた感謝と後ろめたさからだ。

「住み続けている子らがいる。彼らを少しでも守りたい。そんな気持ちからだと思います」

第5章 訴え届き国から予算

2014年、福島の子どもたちの県外での「保養」に初めて国の予算がついた。

学校単位で泊まりがけで自然体験をするのに使える3億2400万円。文部科学省の予算だ。

この予算を真っ先に活用しているのが伊達市だ。伊達市は12年度から、移動教室という名前で「保養」活動に取り組んでいた。

放射線の影響のない場所で思いきり体を動かそうと、小学5年生に県外で宿泊して勉強したり地元の小学生と交流したりさせる。3年かけて市内全21小学校が出かける計画だ。

初年度と13年度は、市の予算とNPOの協力で実施した。そこに国の予算がついた。市の学校教育課長、佐藤喜夫（さとうよしお）（56）は「非常にありがたい」という。

「放射能への不安について口に出す子はいないけれど、心の中に抱えているものはあると思う。移動教室から帰てくると、表情が明るく、たくましくなっています」

14年6月24日から、市立月館小学校の5年生16人は山形県河北町で3泊4日の体験をした。

河北町の溝延小に間借りして、同校の5年生と一緒に算数や体育の授業を受けたり、さくらんぼ狩りを楽しんだり。平日に実施し、授業に組み込んでいるので、代休や振り替え授業の必要はない。

人気があったのは川でのカヌー乗りだ。月館小の太田武志（おおたたけし）（11）は「原発事故前は、近くの川でドジョウを取ったらみそ汁にしてもらえた。事故の後は川に入れなくなった。今日は久しぶりに川で遊んだ」。

福島市のNPO職員、吉野裕之（48）は教師とともに、16人に付き添ってきていた。

学校単位での保養を国に訴えてきた一人が吉野。伊達市と河北町をつないだのも吉野だ。

原発事故後、県内外の様々な団体が「保養」を中心につながった。阪神大震災で生まれたNPO。原爆や平和の問題に取り組んできた市民団体。野外活動のグループ……。

保養が続いてきたのは、そうした草の根の頑張りによるものだった。だが民間だけでは限度がある。学校単位での取り組みが必要だ。それには制度と資金がいる。

吉野は、保養に取り組む人たちとともに東京の集会に加わり、政府の役人に訴えてきた。その成果が形になってきた。

河北町との関係は、1枚のファクスがきっかけだった。

第6章 「ここで移動教室を」

山形県河北町で民宿を営む今田（こんた）とも子（こ）（63）のところに2011年9月、1枚のファクスが届いた。高校時代の同級生の女性からだった。

「ともちゃん、お忙しい中、お世話かけます。福島吉野さんから電話がいくと思います」

なんだこれ。「吉野さん」って誰だろう。

数日後、その「吉野さん」から電話が入った。

福島市のNPO職員として保養のプログラムに関わっていた吉野裕之（48）は、福島県飯舘村の子どもたちの保養先を探していた。それをたまたま知った女性が同級生の今田を紹介したのだった。吉野は尋ねた。

「お宅の近くに、子どもたちが泊まれる場所はありませんか」

今田は町内の温泉施設をあげた。すぐに吉野が下見に来た。

しかし温泉の宿泊施設はシングルとツイン、和室に分かれている。吉野は、子どもたちは大部屋に集まって眠った方がいいと思っていた。

「20人ほどが雑魚寝できるようなスペースはありませんか」

思いつかない。でもせっかくだからと、町議に相談に行き、町議が河北町長に説明した。町長は二つ返事で「そういうためなら町のセンターを使ってい」といつてくれた。そこなら30畳の広さの和室がある。

河北町の自然はすばらしかった。水遊びができる川がある。人々は親切だ。吉野は河北町に魅了される。センターのそばには小学校がある。これなら伊達市の移動教室も受け入れてもらえるのではないか。

吉野はその後ふたたび河北町を訪れた。今田とともに教育委員会に行き、保養とは何か、なぜ保養が必要かを説明した。

町議一人ひとりに、保養の様子DVDを見せて回った。外で遊ぶという、ただそれだけのことで福島の子どもたちがどれほど元気になるか。そう語っている吉野の目に、涙が浮かんでいて、今田は驚いた。

伊達市立月舘小の河北町での移動教室は、そうして実現した。

14年6月26日、今田は朝5時に起床した。月舘小の子どもたちは一昨日着いて町の研修センターに泊まっている。その朝食をつくるためだ。

6時、朝食づくりを始める。

メニューは、キュウリやニンジンたっぷりのポテトサラダ、ベーコン、ヨーグルト。先生の分も入れて24人分だ。おやつ用にと、自宅から持って来たササの葉でちまきもつくってみた。

第7章 フランスへ声届けに

福島市のNPO職員、吉野裕之（48）が取り組む「保養」は2013年の夏、ついにフランスにまで飛び出した。福島市や郡山市の小学6年生8人をつれ、8月2日から3週間、南仏とパリに行ったのだ。

きっかけは12年12月に郡山で開かれた「脱原発をめざす首長会議」だった。吉野はそこで保養プログラムについて発表した。

終わると、南仏・ポークリューズ県の県議会副議長、オリビエ・フロランが声をかけてきた。

「フランスに、ぜひ子どもたちを連れてきてくれないか」

ポークリューズのすぐ隣の県には原発がある。距離はそう離れていない。福島の子どものための保養に役立てると同時に、ひとたび事故が起きればどうなるのか、子どもたちの体験を伝えてほしい――。

フロランがフランスで寄付を集めた。子どもたちの負担は、往復の旅費と3週間の滞在費をふくめて1人5万円ですんだ。

初めての海外旅行。ドバイ乗り換えで南仏ニースに入り、ポークリューズへ。市長や地元サッカーチーム「オリンピック・マルセイユ」を表敬訪問したり、遺跡を見たり。

地元の人たちがピクニックや食事会を催してくれて交流した。子どもたちは、用意していった巻きすと海苔（のり）で太巻きをつくり、お礼にふるまった。

13年8月12日には、南仏の中心都市アビニョンの旧教皇庁のわきの公園で、フロランら招待側の人々といすを並べ、車座で意見交換をした。

事故後の生活についての作文を、子どもたちが読み上げた。

不安だった、外で遊べなくなってつまらない、生活がガラッと変わって気持ちが暗くなった……。

たまたま通りかかった人も次々に立ち止まり、耳を傾けた。後ろの方でじっと聞いていた年配の男性が声を上げた。

「君たちは、原発から65キロ離れていてもそんなことになったのか。私の家は原発から30キロだよ」

参加した子どもたちは、ひと回りもふた回りも大きくなって帰ってきたと吉野は思う。

14年の夏も、フランスに連れて行きたい。応援してくれる人を探しながら、すでに飯舘村や福島市の子どもたちに声をかけ始めている。

「日本だけじゃない。ほかの国の子どもたちも同じ目にあわないようにするために、教訓を伝えに行くんだよ」

第8章 「でも、やんなきゃ」

吉野裕之（48）は2014年の夏、「ホットスポットファインダー」という高性能放射線測定器を手に入れた。

GPS機能を内蔵し、測定器を持って歩くだけで1秒ごとに空間線量を計測し、端末の地図に表示し、放射線マップが自動的につくられるという優れものだ。

測定器3台と無線モジュール、タブレット端末とソフトがセットで230万円。国際協力NGOセンター「JANIC」で紹介された米民間団体が費用を援助してくれた。

測定器は古いベビーカーの車輪横と座席部分にセットし、もう一つは自分の腰につけた。これで地上10センチ、50センチ、1メートルの3点が測れる。国が測定する線量は基本的に1メートルの高さだが、小さい子どもには低い位置での計測が必要と考えたからだ。

6月28日、福島市で小学1年生の娘がいる知り合い3人が集まった。阿部勝公（あべかつきみ）（43）と佐藤直人（さとうなおと）（40）、それと吉野。

阿部の自宅から、娘が通う瀬上小学校までの通学路1キロを測る。次に阿部と佐藤の家までの600メートル。子どもが遊びそうな道路脇の草むらや側溝も合わせて3キロを、3時間かけて測定していった。

端末の地図に、歩いた道すじが水色や黄緑、緑の円になって表示されていく。水色は毎時0・2～0・4マイクロシーベルト、黄緑は0・6マイクロ、緑は0・8マイクロに設定してある。

線量が一番高かったのは、阿部の家から車道に出るまでの私道で、高さ10センチが0・54マイクロ。子どもたちがチョークで描いた線路が地面に残る。高圧水で洗ったので安心だと思って遊ばせていた。ショックだった。

「でも、あんまり心配すぎないようにしたい。そうでないと、ここで生活できなくなる。測定結果は、要注意の場所を知って危険を避ける目安にしたい」

P T Aや保育園などと通学路や散歩のコース、遊び場を測り、要注意地点をチェックしていこうと思う。フランスでの保養とならんで、それが14年の吉野の大きな目標だ。

吉野はいま、福島市内の実家に住む。寝ぼけて朝、長女の楓（6）が隣にいないであわてることが、今でもときどきある。避難別居がもう4年目だというのに。

京都にいる妻のマヤ（48）から「そろそろこつちに来るんでしょ」といわれる。「いや、まだそうもいかないんだ」と答える。先は見えない。体は疲れている。「でも、やんなきゃいけない」

第9章 沖縄、いいんじゃない？

福島県南相馬市小高区で看護師をしていた鎌田昭三（かまたしょうぞう）（70）はいま、沖縄の宮古島市で暮らしている。

南相馬の病院で働いていた。自宅も病院も福島第一原発から20キロ圏内にあり、事故後立ち入りが制限された。いまは避難指示解除準備区域に指定され、日中は立ち入りできるが、家に泊まることはできない。

宮古島に避難して3年2カ月。現在は、市内にある県立宮古青少年の家でボランティア活動をしている。

2014年6月15日。青少年の家が主催する「親子自然散策」があった。市内に住む10組ほどのグループが参加した。鎌田が同行する。けが人や病人が出たときに対応するためだ。

午後、一行が青少年の家に戻った。すると施設の入り口に、小さな灰色のヘビがいた。

長さは30センチほど。大人の親指くらいの太さだ。小学生の男の子を見つけ、捕まえた。手に持って巻き付けて遊んでいるうち、右腕をかまれてしまった。

宮古島には、本島と違ってハブはいない。かまれても危険度は低いが、男の子は痛がる。鎌田は葉を塗り、ばんそうこうを貼って応急処置をした。

「何があるかわからないから、自然の中に入るときは長袖と長ズボンを着ないとだめだよ。自分の身は自分で守らないと」

そういつてから、最後の言葉が自分にもあてはまるような気がして苦笑した。

鎌田は離婚して十数年がたつ。原発事故の前から一人暮らしだ。原発事故後は神奈川県川崎市に避難し、長男（45）夫婦の家にしばらく同居した。

その長男の家で4月中旬、沖縄県が原発事故の避難者を受け入れているとテレビが伝えるのを見た。

川崎市内の借り上げ住宅に避難者として入居する予定だったが、都会の高層マンションはあまり気が進まなかった。第一原発からもっと遠く離れたい気持ちもあった。

沖縄にはまったく縁がなかったが、鎌田はテレビを見ながら「これ、いいんじゃないか？」とつぶやいた。長男は「んだね」といった。

鎌田はテロップに出ていた沖縄県庁の担当部署の電話番号をメモし、翌日、電話をかけてみた。すると担当職員は「単身者の受け入れはちょっと……」。

何だ、だめなのか。がっかりした鎌田に、職員は「でも、宮古島市は単身者でも受け入れていますよ」と教えてくれた。

第10章 ほっとできる新天地

神奈川県川崎市の長男夫婦宅に避難していた福島県南相馬市小高区の鎌田昭三（70）は、2011年4月中旬、沖縄県庁から教えてもらった番号に電話をかけた。

かけた先は、宮古島市社会福祉協議会の番号だった。電話口で社会福祉士の島尻郁子（しまじりいくこ）（55）が応対した。

「単身の避難者なのですが、宮古島では受け入れてくれるのでしょうか」

鎌田が尋ねると、島尻は「大丈夫ですよ。すぐにでもいらしてください！」。

島尻は当時、高齢者の訪問相談などを行う地域福祉活動コーディネーターで、震災と原発事故後は避難者の受け入れも担当した。

震災の被害のひどさに「島にやってくる避難者もいるのではないか」と考えたのだ。

予想は当たった。福島第一原発1号機の爆発から日が経つにつれて、福島県からの避難者が少しずつ、島にやってきた。

島尻は、原発や放射能についての知識はなかった。だが、日増しに事態は深刻になっていると感じ、避難者支援に力を入れていた地元の弁護士と協力しあった。単身者であろうとなかろうと、避難してきたら受け入れなきゃ――。

鎌田から協議会に電話があったのはちょうどそんなころだ。

鎌田は、島尻の返答があっさりしているので戸惑った。「こんな簡単にOKで大丈夫なのか」とも考えたが、これも何かの縁だ。「ではお願いします」。話は数分で決まった。

那覇までの航空券は沖縄県が負担してくれることになった。那覇から宮古島までは自己負担だ。

4月30日午後、羽田から飛び立った。那覇の乗り継ぎに時間がかかり、宮古空港に降り立ったときはすでに薄暗かった。しかし、空港には市の職員が待っていてくれた。

職員が運転する車で、島の南部にある城辺（ぐすくべ）地区に向かった。

3階建ての市営住宅に着いた。1階の部屋が鎌田の新天地だった。

3DK。押し入れには毛布とバスタオルがあり、キッチンには食器がそろっていた。島尻が、市民が持ち寄った支援物資の中からそろえておいてくれたのだ。カギを渡すと職員は帰っていった。

部屋には裸電球が下がっているだけで薄暗い。窓の外はほんとうの闇だ。蚊が多く、4月なのに蒸し暑い。それでも、鎌田はほっとした気分に包まれた。

第11章 コンパス使い島歩き

沖縄県宮古島市に避難した福島県南相馬市の看護師、鎌田昭三（70）は、着いた翌日の2011年5月1日から、生活用品をそろえ始めた。市がライトバンを貸してくれた。

家賃は無料だが、部屋には何もなし。市の中心部で冷蔵庫、洗濯機、ガスコンロなどを買った。鎌田は独り身だ。少しでもコンパクトで、値段の安いものを選んだ。

市営住宅は島の南部にある。歩ける範囲に商店がないのが不便だった。スーパーが遠いため、肉や野菜を買うにも車がないと不便だ。

翌月から軽自動車に変わったが、市はずっと使っていていいといってくれた。だが、車にカーナビはない。道に迷うことが多かった。そんなときは、コンパスをよく使った。

鎌田は野外活動や山登りが趣味だった。福島にいたときも、道に迷うとコンパスで方角を調べた。その習慣が宮古島でも役立った。

身の回りの環境を改善するため、やれることは自分でやった。

市営住宅の周囲は雑草が生え放題だった。市の車には鎌が積んであり、気になって草刈りを始めた。

時折、ごみも落ちていた。菓子袋やらオムツやら。草刈りのついでに、燃えるごみの袋に入れて処分した。草刈りとごみ拾いを半年ほど続け、すっかりきれいになった。

玄関先の1メートル四方もないスペースを耕し、オクラなどを植えた。

同じ住宅に、福島からの避難者が住んでいた。地元住民とも知り合いになった。

「原発事故で、当分は家に帰れないと覚悟していた。だから、とにかく島に溶け込むことに一生懸命努力しました」

半年後、市内中心部の平良地区の借り上げアパートに移り住むことができた。歩いて買い物に行けるようになった。車は市に返上したが、避難者を支援する弁護士から別の車を譲ってもらい、足は確保できた。

12年2月11日、南相馬市小高区の自宅に、初めて一時帰宅した。

玄関を開けた。

クモの巣が張り、ネズミのふんが転がっている。カビ臭く、ほこりっぽい。宮古島に持って行きたい物もなかった。せめて記録に残そうと、室内外をビデオカメラで撮影した。

次第にいたたまれなくなり、30分足らずで家を出た。それきり帰宅していない。

鎌田は「当分は宮古島で生きていくしかない」と思うようになった。

第12章 虹のような懸け橋に

福島県南相馬市の鎌田昭三（70）は、沖縄県宮古島市に避難して1年がたったころから、「福島の言葉で語り合えるような場がほしい」と考えるようになった。

自分が住む市営住宅にも避難者がいるのだから、市全体でもっといはずだ。避難者が集まるような組織をつくれないか――。

鎌田は市社会福祉協議会の社会福祉士、島尻郁子（55）に相談した。鎌田が宮古島への避難を決めて以来、島尻は一番の相談相手だった。

島尻は、お祭りやクリスマスなどのイベントがあると、自分が知っている避難者に声をかけていた。

しかし、「お膳立てされた行事に客として呼ばれるだけでは、避難者は居心地が悪いと感じているのではないか」と思うようになった。

鎌田から相談されたのは、そんなときだった。すぐに賛成した。

「避難者みずからが、宮古島で生きていく上で避難者同士の結びつきが必要だ考えるようになった。それを大事にしたかったんです」

島尻の助言で、鎌田は避難者のだれがどこに住んでいるか、市に教えてもらえるよう頼んだ。市は直接は教えてくれなかったが、市が了解を得た23世帯と連絡が取れた。地元紙に参加募集の広告も出した。

最終的に18世帯が参加し、2012年9月、避難者の交流組織「虹の会」ができた。鎌田が名付け親だ。

会員の考えや境遇はさまざまな色をしているが、福島から2千キロも離れた宮古島に住む自分たちにとって、1本の虹のように結束することは大事だ。そんな思いから付けた。

初会合で鎌田が会長に選ばれた。島尻も会員で、会員規約の草案をつくり、この内容で承認された。

「東日本大震災及び福島第一原発の事故による避難者の交流を深め、親睦を図るとともに、宮古島市民との交流を通じ、お互いに理解し合うことを目的とする」

主な活動は月1回、土曜日に開く交流会だ。会費は月300円。お茶を飲みながら身の上話をする。ほかにもバーベキューや忘年会、地元へ帰る会員の送別会もやった。

設立当時、島尻は協議会から独立して福祉NPOを立ち上げる準備を進めていた。そのために借りていた事務所を、交流会の場に提供した。

原発と米軍基地。福島県民と沖縄県民は、ともに国策の犠牲を強いられている。会が両者をつなぐ懸け橋になれば――。鎌田は「虹」に、そんな意味も込めた。

第13章 心を縛る避難の記憶

沖縄・宮古島に避難している鎌田昭三（70）は、看護師の資格があるが、いま仕事にはついていない。福島県南相馬市の精神科病院で30年近く看護師をしてきた。男性看護師は当時、引く手あまただった。宮古島にきてから、経歴を知った病院や福祉施設から「看護師に戻る気はないか」と誘いを受けた。せっかくの誘いだが、どうしても首を縦に振れない。年金があるし、東京電力の賠償金もある。生活面で困ってはいないこともある。

しかしそれ以上に、精神的にきついのだ。震災直後、患者とともに避難先を転々とした。それが今も頭を離れず、一步が踏み出せない。

2011年3月11日、鎌田は日勤で病院にいた。当時、興奮状態など症状が激しい急性期の精神病患者を担当していた。震災そのものでは院内に混乱はなかった。

翌12日、夜勤が明けてそのまま勤務し、夕方に自宅へ帰るとテレビも見ずに寝てしまった。福島第一原発1号機が水素爆発を起こしたなんて知らなかった。

13日朝、目を覚ますといやに静かだった。近所の物音や車の音がしない。不安を感じ、近くの南相馬市小高区役所へ行った。そこで原発が爆発したと知る。近所の住民はすでに避難していた。

鎌田は急いで自宅に戻り、リュックに通帳や印鑑、手当たり次第に洋服を詰め込んですぐ病院へ向かった。パトカーと警察官がいた。病院には100人以上の患者がいたと記憶している。警官はこれから避難すると告げた。

翌14日夜、やっと来たバスに患者と乗り込んだ。スクリーニング検査を受けてから、飯館村を抜けて川俣町、郡山市を通り、15日早朝、いわき市のいわき光洋高校に着いた。

居場所となった体育館は底冷えがした。医療を受けられる環境ではなく、午後には南会津町の老人福祉センターへ向かった。患者は体調を崩し始め、移動をいやがる者もいた。必死に患者をなだめながら付き添った。

17日夜、患者が東京の病院に引き取られることが決まる。鎌田の病院の、事実上の解散だった。

鎌田は東京まで同行し、川崎市に住む長男に迎えに来てもらった。しかし、多くの付き添い職員は家族の避難先さえ知らなかった。

「世のため人のため、看護師をやったほうがいいとは思いますが……」

第14章 「本当に戻れるのか」

福島県南相馬市から沖縄県宮古島市に避難している鎌田昭三（70）の島での生活は、けっこう忙しい。

週末は県立宮古青少年の家でボランティア。

週1回、習い始めた三線（さんしん）の稽古。

週2回、吹き矢のサークル。肺呼吸を整え、健康に効果があるとのことで、福島のときから続けている。

近くに30坪ほどの畑も借りた。オクラやゴーヤを育てている。「土の質が福島と違うんで、管理が大変」といながら満足そうだ。

島の互助組織「もやい」にも参加し、泡盛を酌み交わす。原発事故前には考えもしなかった南の島の人たちとの交流。それが新鮮だ。

一方で、故郷への思いも断ち切れない。

南相馬市は、鎌田の自宅がある小高区の避難指示の解除目標を、2年後の2016年4月としている。

14年6月下旬、鎌田の自宅に行ったという知人から写真が送られてきた。

玄関脇に、人の胸の高さほどもある雑草が生い茂っている。2階のベランダはサビが浮き出ている。屋根の雨どいは外れてしまった。積雪の重みに耐えられなかったらしい。

日中は出入りができることになっている。しかし知人は「町には人の気配なんてない」。

2年後に自宅に戻れても、家がこんなに荒れていたらすぐには住めない。家屋の修復はどうなるのか。

避難指示が解除されても、人が住まないなら町は消滅してしまうだろう。「自分も、住むかどうか迷っています」と鎌田はいう。

住まないと決めれば新しい天地は宮古島だ。だが、住民票は南相馬市小高区に残してある。

いまま南相馬市から書類が届く。部屋には南相馬市の電子掲示板も置いている。

「生まれ育った場所と縁が切れるっていうのは……。いま戻ったって、とても住める状態じゃないのはわかってるんですがね」

福島に帰るか帰らないか。鎌田自身は「五分五分」と表現する。

宮古島で人のつながりもできた。最後はそこをどう判断するかだ。

「でも将来、本当に南相馬に戻るのでしょうか」

同じ6月下旬、鎌田に断って、小高区の鎌田の自宅を訪ねてみた。

草ぼうぼうの玄関から、やっ和中をのぞくことができた。お茶好きの鎌田らしく、こたつの上に湯飲み茶わんがきれいに重ねて置かれていた。

第15章 戻らないと後悔する

福島県から避難する人が多い中で、首都圏での職を捨て、Uターンした青年がいる。

南相馬市出身の伊藤孝介（いとうこうすけ）（32）。埼玉県戸田市に住み、東京の会社に通っていた。大震災が起きたときは職場にいた。

福島県立原町高校を出て東京の大学に進み、教育事業の大手企業に就職する。2年後、渋谷区にある販売促進コンサルティングの会社に移った。

商品の売れ行きを伸ばすための企画を考えたり、販促品の製作を管理したり。中国への出張も多かった。そんな中で震災だった。

南相馬市原町区の実家は無事だった。家族は2011年3月14日の3号機の爆発でいったんは郡山市へ避難したが、10日ほどで戻っていた。

伊藤が事故後初めて帰省したのはその年5月だった。

母校の中学校の校区を歩いた。海水浴をした海岸は破壊され、友人の家がなくなっていた。

6月、伊藤の携帯電話に、高校の同級生で南相馬市議の但野謙介（ただのけんすけ）（32）から電話がかかってきた。

「伊藤君、助けてくれ！」

事故の影響で売れなくなった市内の種苗農家が地元のNPOの協力で、ゴーヤを避暑用の「緑のカーテン」として売ることになった。

「都内の企業が関心を示しているけれど、頻繁に上京する資金も体力もない。伊藤君にエージェントをやってほしい」

迷わず引き受けた。本業の合間に資料を作り、企業を回った。

週末は南相馬に通った。NPOの活動を手伝い、支援物資のパンを「南相馬市復興夏まつり」や相馬野馬追の会場で配った。

南相馬の人口は7万を超えていたが、事故直後は1万を切ったといわれていた。行くたびに、復興の人手が足りないと感じた。

会社には恩があるし、昇進も目前だ。でも、自分は故郷の南相馬でやるべきことがあるんじゃないか。

8月、決心する。南相馬に戻って復興の仕事に集中しよう。いま戻らないと後悔する。

福島県職員をしている父の稔（みのる）（58）に、はっきりとUターンの意思を伝えた。

稔は驚かなかった。週末に戻ってくる息子との会話で、大方の察しはついていた。ただひと言、念を押した。

「生活、成り立つのか。甘いことじゃねえぞ」

第16章 学び、遊んだ男子会

東京の会社を辞め、福島県南相馬市へのUターンを決意した伊藤孝介（32）に、父の稔（58）は条件をつけた。

一、毎月3万円を家に入れる。

一、復興のために何をするのか、紙に書いて自分に見せる。

「覚悟を確かめるためでした」と稔はいう。

2012年1月、伊藤は埼玉県戸田市のマンションを引き払い、南相馬の実家に戻った。

南相馬通いの間に、NPO「フロンティア南相馬」の理事になっていた。そこを活動拠点にした。

フロンティア南相馬は、原発事故直後の4月に南相馬の若者たちがつくった組織だ。

企業や行政の協力を得て、通学路の放射線量マップの作製や、市内企業のネット販売支援、子どもの遊び場づくりなどをしていた。

伊藤は遠足事業などにかかわった。親子をバスで放射線量の低い地域に連れて行き、思い切り外遊びをさせる活動だ。

助成金の申請、学校などとの調整、参加者への連絡と引率。深夜まで働き、いつも目の下にはくまができていた。

「でも、一から事業をつくる喜びがありました」

そのうち、被災者が「無料援助」に慣れ、受け身になっているように感じるようになった。

地元の要求とずれているのに、支援側の助成金の縛りで融通が利かないことも出てきた。

本当の復興には、助成金に頼らない経済基盤が必要だと感じた。

そのころ、スマートフォンのアプリケーションを開発する任意団体「南相馬ITコンソーシアム」を設立する動きがあった。

IT産業は放射能の影響を受けない。事業が伸びる可能性がある。これはいけるかもしれない――。

12年10月、事務局長に就いた。金銭管理や取引先との交渉を引き受けた。「いずれは株式会社に」「たくさんの若者をエンジニアに育てたい」。そんな夢を抱いた。

さらに手を広げたプロジェクトがある。「福島男子会」だ。

自分のような若い男子同士で、福島の未来をおもしろくしたい。浜通りの他地区や中通りの同世代男子にも声を掛け、時には酒を飲みながら語り、学び、遊んだ。

自分の未来にも思いをはせた。復興関係の集まりで知り合ったある女性の存在が大きくなっていた。

13年1月、その女性にプロポーズした。

第17章 「別居婚」のジレンマ

南相馬にUターンした伊藤孝介（32）がプロポーズしたのは、郡山市から札幌市に一人で避難した2歳下の女性だった。

彼女は「これから子どもを産むかもしれない自分が、原発の近くにいたるべきではない」と自分で判断した。札幌ではラジオ番組のパーソナリティーの仕事を始めた。

福島には頻繁に戻った。原発事故にストレスを感じる女性が語り合える場をつくった。

伊藤は、NPOのつながりで彼女の活動に協力した。2人で会う機会が増える。てきぱき動く彼女の姿に、次第にひかれるようになった。

伊藤のプロポーズに、彼女はOKした。ただ、お互いがそれぞれの場所でやりたいことがある。とりあえず別居で踏みだそう。

2013年3月12日、伊藤はフェイスブックで結婚を宣言する。

「どこで暮らすのかより誰と生きていくのかを優先しました」

月に1、2回、1泊で札幌に行く。妻も月に1、2回福島に来る。そんな新婚生活だった。

6月、妊娠がわかった。妻から「1人で妊娠生活を送るなんて絶対無理」といわれた。

伊藤の札幌での滞在が、長いときで1週間に及ぶようになった。

そんなある日、事務局長をしていた南相馬ITコンソーシアムで、スタッフの一人が辞めるといいだした。伊藤は、事前にまったく気がつかなかった。仲間から事情を尋ねられたが、何も答えられなかった。

事務所内の状況を把握できなくなっている。札幌行きなどに時間を取られすぎているからではないか。悩むようになった。

そんな伊藤に、ふつう夫婦は一緒にいるべきだといっていた人がいる。南相馬市のNPO「はらまちクラブ」理事長の江本節子（えもとせつこ）（67）だ。伊藤とは復興の話をよくしていた。

原町区のショッピングセンターの一角に、江本がかかわる集会所がある。結婚直後の伊藤が仕事の話をしにやって来たとき、カウンターで話しかけた。

「家族は一日一日の積み重ねでできる。いっしょに住めるなら、そうすべきよ。家族をしあわせにできない人間に復興なんてできないよ」

原発事故は当時、家族の間にも影を落としていた。母子避難をした妻とうまくいかない夫。放射能への見解で行き違う夫婦。不倫や離婚が人々の話題になる機会も増えていた。

第18章 妻子と土のある生活

2013年10月、伊藤孝介（32）は福島県の南相馬を離れ、札幌の妻の元に移った。4カ月後の14年2月、長女が生まれた。

妻の家は北海道が提供する避難者住宅だ。28・15平方メートルのワンルームマンション。縦に6歩、横に8歩。2人分のふとんを敷いたら床が見えなくなる。収納場所が足りず、鍋は洗濯機の上に置くしかない。

道庁に電話して、広い部屋に移れないか尋ねたが、「ちょっと無理ですね」といわれた。

今は、物を置かない生活を徹底している。それでもベビーカーや飲料水は置き場に困る。仕方なくマイカーの荷台に積んでいる。

仕事は、自営でプランナーを始めた。これまでにジュースのブランドづくりや、写真講座の宣伝を手がけた。防災士の資格も取った。何かのときに役立てば、と思った。

「事故や災害が起きて札幌を出ることになっても、どこでも食べていける力をつけようと思っているんです」
復興支援活動の仲間に、札幌での就職先を紹介されたが、断った。夜遅くなる仕事だったので、家族との時間が持てないと思ったからだ。

ある休日の朝。外はいい天気だ。

「畑に行こうか」

布団を壁際に折り重ね、3人で車に乗り込む。10分ほど走ると、仲間で借りている畑に着いた。春菊、トマト、ネギなどが育っている。

雑草を抜いた。「ほら」と娘の手に草を触れさせてやる。妻はヨモギを摘んだ。干してお茶にしたり、お風呂に入れたりするのだという。

ヤギが草を食べる様子を見ながら、カフェで無農薬野菜と酵素玄米の朝食を食べて、自宅に帰った。自然に親しみながら、子どもと妻との生活を何より優先している。

東京から福島に戻ったのは、人手不足の故郷・南相馬で、少しでも復興の役に立ちたいと考えてのことだった。今は、避難した妻を支えることが大切だと思っている。

「復興の定義は多様でいい。手の届く範囲の人を幸せにすることが、ぼくの考える復興です」

福島のために、なにかしたい気持ちは変わらずある。原発事故で札幌に避難している人や支援している人たちの集まりにはよく出ている。

最近、避難者の父親が引きこもりがちだという話が出た。そんな避難者を元気にするにはどうすればいいか。今はその仕掛けについて仲間と話しあっている。

第19章 帰還困難でも自宅へ

福島県大熊町の栃本信一（とちもとしんいち）（62）は2014年6月21日、避難先の南相馬市から自宅に一時立ち入りをした。妻のカズエ（62）もいっしょだった。

自宅は福島第一原発から南に3キロしか離れていない。車で数分も走れば、汚染水タンクの不気味な姿が見えてくる。

栃本の土地は自宅、田畑と山林、墓地の計3ヘクタール。すべてが帰還困難区域に入っている。

栃本の職業は、コインランドリーやクリーニング店の業務用洗濯機の修理だ。

事故後は転々と避難を繰り返し、12年11月からは南相馬市鹿島区の仮設住宅で暮らす。だが仕事道具の溶接機や長ばしご、電動工具などは、半畳しかない仮設住宅の物置には入りきらない。

そのため、道具のほとんどは帰還困難区域にある自宅の倉庫に入れてある。自宅前はまだ毎時5マイクロシーベルトもある。高い放射線量だが、仕事のためには自宅への立ち入りを繰り返さざるを得ない。

14年6月21日午前8時すぎ、ライトバンで仮設を出た。9時前に浪江町の国道6号沿いのスクリーニング場に立ち寄る。そこには「TEPCO」マークがついた東京電力の青い作業服を着た職員が並んで立っている。

「5時間以内に戻ってください」との説明。毎回のことだ。車を発進させると全員が一斉に頭を下げた。車が外に出るまでそれが続く。

「お疲れさま、つてことなんだね。いつもこうなんだよ」

そこから自宅は十数分の距離だ。海から1キロも離れていない。

家の倉庫からポータブル発電機を出して始動させた。その電気で、カズエが自宅の中で掃除機をかける。

「いつもネズミのフンだらけ。帰れないのに、掃除したってねえ……」。ネズミの忌避剤を家の中の所々に置く。

栃本は、裏山にある農具倉庫に向かう。その前には2アールの原っぱが広がる。

「ジャガイモなんかをつくってた畑なんだ」。だが、伸びた雑草が一面を覆い、畑の面影はない。

栃本は車から噴霧器を出して背負うと、除草剤をまいた。それから仕事に必要な工具を車を積む。

午後1時前、ふたたび浪江町のスクリーニング場に向かった。足裏を線量計で測る。「基準値以内です」の報告。

自宅滞在の4時間で、積算線量は20マイクロに達した。

第20章 「貯蔵予定地」に落胆

福島県大熊町の栃本信一（62）は、自宅宅地のほか畑や山林など計3ヘクタールの土地を所有する。

それが除染廃棄物の中間貯蔵施設の予定地にかかる見込みであることがわかったのは、2013年12月15日付の新聞でだった。

「また住めるのではないかと思っていたのですが……。予定地に入るとわかって、がつくりきました」

大熊町が中間貯蔵施設の候補地であるのは知っていた。だが施設には運搬車の出入りが必要だ。国道沿いになるだろうから、海沿いの自分の土地はかからないと考えていた。

栃本は4代目だ。北海道で警察官だった曾祖父は、酒を飲んで暴れる男をなだめようとして、持っていた短刀を奪われて刺され、命を落とした。墓碑にも記されている。その補償で曾祖母が大熊に土地を買い、移住して開拓した。由緒ある土地だ。

長男に生まれた栃本は、継いできた土地と家を守る責任があると考えている。放射線量が高くとも、中間貯蔵施設が建設されようとも、曾祖父の命と引き換えの土地を売ることはできない。

中間貯蔵施設は、負債として子どもたちの世代にかぶさっていく。基本的には反対だ。しかし、設置も仕方ないかと考える部分もある。

大熊町は原発で様々な恩恵を受けてきた。それがあがる以上、迷惑施設でも協力せざるを得ないのではないか。迷惑施設だけ他の地域につくれとはいえない。

14年6月1日、南相馬市で国主催の中間貯蔵施設の説明会があり、栃本も出席した。

環境省や復興庁の担当者が施設概要と今後の見通しを説明した。だが、土地を国が買い上げるかどうかなど肝心の内容には触れなかった。

説明のあと、双葉町の住民が「ふるさとの土地を簡単には売れない」と発言した。栃本も「土地は手放せない」と発言した。せめて賃貸借契約なら手放さずにすむ。

環境省の職員が返答した。

「皆様のご心情は察してあまりあり、本当に申し訳なく思っております。皆様の心の叫びを、きちんと受け止めてやっていきたい」

その上で、こういった。

「なんとか復興を進めていきたいのです。そのためには除染と、除染土の貯蔵がぜひとも必要です。それをなんとか理解してもらいたい」

曾祖父の墓がある場所は、高濃度の放射性セシウムを含む除染廃棄物が貯蔵される予定だ。

第21章 除染しても仕方ない

福島県大熊町の栃本信一（62）は25の資格や免許を持っている。

クレーン運転士免許、ガス溶接やボイラー取り扱いの技能講習修了証、防火管理講習修了証……。

もっとも新しいのが、除染業務の現場監督向け特別講習の修了証だ。2012年10月に取った。

ふるさとの放射線量を少しでも下げたい。そして、いつかは自宅に住みたい。そのために、自分が率先して除染作業に加わろうと考えたのが講習を受けた動機だった。

栃本は11年5月中旬、町長あてに手紙を出したことがある。

そのころ町は「復興に向けて意見のある方は申し出を」と呼びかけていた。それに応じた。

手紙にはこう書いた。

「私は原発とともに歩んできた。家族も養えた。生活も潤った。原発の立地はよかったと認めたい」

「でも今は負の遺産だ。いまこそ自分の知識と技術を何とか生かしたい。除染となれば、大いに協力したい。町をなくしたくない」

町は復興計画を策定する方向で動いていた。手紙のせいか、町は栃本に、復興計画検討委員会に加わってほしいといつてきた。

栃本も、復興に協力できるならと、委員会に参加することにした。それで除染の資格を取ったのだ。本気で除染に取り組むつもりだった。

でも、もうその考えはなくなってしまった。中間貯蔵施設の予定地に自分の土地がかかる見込みである以上、除染しても意味はない。

しかも県内の除染は進んでいるように見えず、福島第一原発では汚染水漏れが続く。いったい、このトラブルはいつ片付くのだろうか。

以前は、一時立ち入りのたびに大熊町の自宅周辺の住民と顔を合わせた。しかし、墓参の時期以外は、中間貯蔵施設の話が出てから、一時立ち入りしてもだれにも会わない。

「中間貯蔵施設ができてしまったら、自分が生きているうちに自宅には帰れない。ほかの住民もそう思い始めているようだ。もう、除染したって仕方がない」

それでも、大熊町とは何とか関わっていききたいと真剣に願う。

中間貯蔵施設で、地元の人間を雇用してもらえないだろうか。車両や人の出入りがある以上、施設管理の仕事があるはずだからだ。

「お金目当てではない。何らかのかたちで住民が関わっていれば意見もいえる。そうでもしないとまったく縁が切れてしまう」

第22章 支え合わないよね

福島県大熊町の栃本信一（62）は、平日の午前7時には、南相馬市原町区にある得意先のクリーニング店に顔を出す。

大型の業務用洗濯機や乾燥機は、平日の日中にフル回転で使われる。このため開店前に、栃本が動作確認から配線チェック、清掃までやっておく必要がある。週末に、機械のメンテナンスを頼まれることも多い。

栃本が心がけているのは、機械修理だけではない。

「きょうも元気？」

「あれ、出勤が遅いね。遅刻なんじゃないの？」

クリーニング店の従業員一人ひとりに声をかける。軽口で笑わせ、世間話をひとしきり。栃本を中心に店内が笑顔になる。

ほかにも、いろんなことを頼まれる。屋根の雨漏り修理、煙突の補修……。

店には、津波と原発事故で被災した従業員がいることも知っている。時には相談相手になることもある。

「南相馬では、みんなが一生懸命生きている。支え合わないよね」

栃本は1970年代、福島第一原発の建設にかかわった。

大熊町の県立高校を卒業後、父にならって鉄筋工になる。それで原発の建設現場に入り始めた。

その後、原発の仕事を続けるために資格を取ろうと思った。大型車両の免許を取り、鉄筋の運搬をする。さらにクレーン免許を取って、大型構造物の搬送もした。

原発建屋の建設の最終段階では、核燃料を入れるキャスクの搬入と搬出の試運転が繰り返された。栃本もクレーンの運転士として、その試運転に従事した。

とくに保管プールへの搬入と搬出の際は、慎重な操作が必要になる。そのころには、栃本は熟練技術者になっていた。

雇い先から、原発の運転開始後も現場に残るよう求められたが、原発での作業から離れた。4号機の運転開始間近のころだった。

「家族もいたし、放射線量の高い場所で仕事をするには、やっぱり抵抗があったんですね」

その後は自動車部品のプレス会社へ。設備管理の仕事をする中で機械の知識を得て、業務用洗濯機の修理の仕事に行き着いた。

「自分でやった仕事だから分かるが、原発の建屋はものすごく頑丈な建物です。それがあんなに激しく壊れてしまうんですねえ。信じられない」とつぶやいた。

第23章 方向転換し新天地へ

真夏の太陽が照りつける南相馬市原町区の一角で新築工事が進む。大熊町小入野（こいりの）の栃本信一（62）の新居だ。遠くに阿武隈山地が見渡せる。

周囲の畑の間に、いくつも住宅が点在する。真新しい家が多い。浪江町や南相馬市小高区など、避難指示が出ている地区の住民が自宅に戻るのをあきらめ、次々に家を建てているのだという。

大熊町の栃本の自宅からは海が見えた。新居では、もう見えない。しかし、そのことには仮設住宅暮らしでもう慣れてしまった。

新しく購入した土地の総面積は600坪。大熊で農業もしていたから、半分はいずれ農地にする。

これまで、東京電力から出ている賠償金には手を付けなかった。何が起きるかわからないから、借金もぜいたくもせずにやってきた。そうしてためたお金をつぎ込んだ。

除染ができれば、いつかは大熊町に帰ろうと願ってきた。でも、方向転換を決めた。

「消費税もさらに上がりそうだし、東京五輪で建築資材が手に入りにくくなっても困る。中間貯蔵施設の設置計画もはっきりした。出遅れないうちに動こう、と」

大熊町の先祖代々の土地を手放すつもりはない。国と賃貸借契約を結ばずむ話だ。でも、中間貯蔵施設ができれば自由に出入りすることは難しくなる。新天地に土地を求めるしかなかった。先祖の墓も、移転先の土地を確保した。

新居は、2014年9月末には完成する見込みだ。

いわき市に避難していた長男の弘一（こういち）（39）が3月に、南相馬市鹿島区に引っ越してきた。いま栃本が住む仮設住宅の別棟だ。

弘一は南相馬で新たに建設会社の仕事を見つけた。婚約も間近で、新居で栃本と一緒に暮らす予定だ。

栃本は「やっと歯車がうまく回り始めたようです」と喜ぶ。

震災前から認知症の症状があった父（83）の容体がいま一つだ。今は原町区内の施設に入所しているが、転々と避難しているうちに症状が悪化した。それでも、栃本が建設中の新居を見せると涙を流して喜んだ。

大熊の自宅にはときどき行くつもりだが、「引っ越してしまえば新しい家の方に愛着がわくだろうね。墓を移したらなおさらだ」。

プロメテウスの罠〔 5 0 〕 4年目の夏「子どもを〈保養〉で守るんだ」

著 者 朝日新聞（山田佳奈、岩堀滋、壺田和華子）

発行所 朝日新聞社

〒104－8011 東京都中央区築地5－3－2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104－8011 東京都中央区築地5－3－2

<http://www.asahi.com>

2014年8月28日 WEB新書版発行

2015年8月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-404-3

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2014年8月28日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。 企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。